

## 長期療養サービス未利用が医療利用に及ぼす影響

### - 男女格差のPSM治療効果

○ 霊山大学 クォン・ヒョンジョン

イム・ジョンミン(成均館大学)

キーワード:長期療養サービス、医療利用、男女差、傾向スコアマッチング

\* 外部研究支援(COI): この論文は2023年韓国教育部と韓国研究財団の支援を受けて行われた研究である(NRF-2023S1A5A2A01082274)。

### 1. 研究目的

最近の老人長期療養保険申請現況資料によると、過去5年間(2016年~2021年7月)に老人長期療養等級の認定を受けた等級認定者は計432万3784人で、等級認定を受けても長期療養サービスを利用しなかった未利用者が70万8298人に達することが分かった。サービス未利用者数は2016年の7万6436人(14.7%)から毎年増加し、2021年7月現在15万7035人(17.1%)であることが分かった。

過去5年間で未利用者が71万人に迫るという点で、サービス対象者の欲求に応じた適切なサービスが満たされていないという批判とともに、現行の長期療養サービスが高齢者の機能状態の変化と医療ニーズに適したサービスの提供が必要であり、利用者中心の医療的管理とケアの欲求が反映されるようにサービスの改善が必要だという指摘が提起されている。本研究の目的は実際に長期療養サービス未利用者を対象に未利用関連要因を調べ、未利用者が医療利用に及ぼす影響を明らかにすることにある。特に、未利用者の医療サービス利用に性別による格差が発生するかどうかをPSM(Propensity Score matching)処理効果を通じて分析することを目的とする。

### 2. 研究の視点および方法

研究対象者は合計5,606人の長期療養サービス未利用者を対象に、分析データは2019年の長期療養実態調査資料を活用して分析した。

ランダム実験(Random experiment)と同様に統計的な方法でcomparison group(比較集団)を作り、次に二つの集団(実験集団と比較集団)の結果をATE(Average Treatment Effect: causal effect)またはATT(Average Treatment effect on the Treated)、すなわちAlternative treatment effectsで計算する方法である。

本研究は、長期療養サービス未利用者と同質な集団を作るために、未利用決定要因を投入したプロビットモデルを通じて比較集団を構成した。次に、長期療養サービス未利用集団の医療利用(外来利用、療養病院)を把握するために、外来利用(経験、日数)と療養病院(経

験、日数)の ATT を比較した。統計パッケージは Stata を使用して分析し、コマンドは pscore、attnd を活用した。

### 3. 倫理的配慮

本研究は霊山大学校機関審査委員会(2023年6月28日、IRB番号:YSUIRB-202306-HR-130-02)の承認を受け、倫理的な手続きと基準を遵守した。本倫理審議委員会はKGCP及びICH-GCPを遵守し、生命倫理及び安全に関する法律など関連法規を遵守した。

本資料は2019年長期療養実態調査で韓国保健社会研究院からIRBを取得した資料であり、本研究は二次資料を活用した。研究チームは統計庁のMDIS(Microdata Integrated Service)を通し、手続きに従って本資料をダウンロードした。

### 4. 研究結果

同じ条件の長期療養が必要な男性高齢者が長期療養サービスを利用しない場合、外来入院経験及び入院日数、療養病院入院経験及び入院日数がすべて有意に増加した。

長期療養が必要なサービス未利用女性高齢者も比較集団(長期療養サービスの利用者と比較して)外来入院の経験及び入院日数、療養病院の入院経験及び入院日数の全てが有意に増加した。

しかし、男性は比較集団間の平均差で外来入院経験と入院日数が高い一方、女性は比較的療養病院入院経験と入院日数が高かった。これは男性と女性の両方で長期療養サービス利用に代わって医療利用を代替する効果があることが確認されたが、性別による医療資源利用に差が見られた。

### 5. 考察

男性高齢者の場合、公的ケアを利用しなくても非公式な家族のケアを受けることができるため、必要に応じて外来医療資源を活用した医療サービスが行われるのに対し、女性高齢者は、男性高齢者と比べ家族のケアが不在であるため、長期療養サービスを利用せず、療養病院(医療利用)がケアを代替する効果があると考えられる。